

まちづくりを題材とした高大連携による 「総合的な探究の時間」(地域探究活動)の取組方法に関する一考察

渡 邊 一 成

要旨

本稿は、筆者が2017年度以降取り組んできている、“まちづくり”を題材とした高大連携による地域探究活動の概要や成果、課題を整理し、「総合的な探究の時間」における“まちづくり”を題材とした高大連携の可能性と期待される事項について考察することを目的とした。

その結果、①まちづくりは様々な地域課題に対し、横断的・総合的な視点より解決に取り組み、「地域(フィールド)」という具体性があり、生徒でも理解しやすく、馴染みのあるテーマであることから、「総合的な探究の時間」において“まちづくり”を題材とすることは適切であると考えられること、②まちづくりを題材として「総合的な探究の時間」に取り組む際には、高大連携とともに、問題解決への対応などを担っている市役所や地域団体等の方々にも参加いただき、探究課題に対する助言等をいただくことが有効であること、③「総合的な探究の時間」での学習を契機とし、生徒が地域への愛着を高め、ふるさとへの愛着や誇りを培う上で、大きな効果をもたらすと考えられること、などが明らかとなった。

キーワード：総合的な探究の時間、地域探究活動、高大連携、まちづくり

1. はじめに

グローバル化の進展やICT・人工知能などの技術革新に伴って、社会構造が急速かつ大きく変革する時代背景を踏まえ、文部科学省は新たな価値を創造していく力を育てるために、2014年12月の中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革について」を契機として高大接続改革の取組みを進めてきている¹⁾。

こうした中、高等学校と大学が連携し、高校生に大学レベルの教育に触れる機会をつくる等の高大連携事業は、高校生のための公開講座や大学教員による出張講座、オープンキャンパスでの模擬授業などの取組みとして、多くの大学で実施されている²⁾。

また、高大連携事業は、講義等の座学だけでなく、高等学校と大学とが「総合的な学習の時間(1999年

の学習指導要領改訂により創設、2000年度から移行措置として導入)」の教育内容で連携できるようになることが、これからの高大接続を考える上で重要な視点であるとの指摘もあり³⁾、地方公立大学として持続可能な地域社会の発展に寄与する人材育成を旨とする本学においても、2017年度より生徒が自発的に横断的・総合的な課題学習を行う「総合的な学習の時間」等の場面において、連携の取組みを進めてきている^{4),5)}。

さらに、文部科学省は2018年3月に高等学校学習指導要領を改訂し、「総合的な学習の時間」は、より探究的な活動を重視する視点から位置付けを明確にするために「総合的な探究の時間」に改められ、移行措置として2019年度入学生から年次進行で先行実施されてきている。同省が2018年3月に発出した「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説/総合的な探究の時間編」では、高等学校と大学の連携事例

として、大学教員による講義や専門的な内容の教授、テレビ会議システムなどでの交流により探究を進めるという取組みが示されている⁶⁾。

以上の背景を踏まえ、本稿は、筆者が2017年度以降取り組んできている、“まちづくり”を題材とした高大連携による地域探究活動の概要や成果、課題を整理し、「総合的な探究の時間」における“まちづくり”を題材とした高大連携の可能性と期待される事項について考察することを目的とするものである。

以下、第2章では、「総合的な探究の時間」における地域探究活動の枠組みや“まちづくり”を題材とした取組事例、本学における高大連携の取組みの特色を整理し、第3章では2017年度以降、継続的に高大連携事業として実施してきている岡山県立笠岡高等学校の「総合的な探究の時間（ACT）」（地域学）について、その概要と特色、実施効果等を考察する。そして第4章では、以上の整理・考察を踏まえ、“まちづくり”を題材とした「総合的な探究の時間」の高大連携の可能性や今後期待される事項について展望していく。

2. まちづくり分野における「総合的な探究の時間」の取組経緯

2-1 「総合的な探究の時間」において求められる探究活動

本節では、文部科学省が2018年3月に発出した「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説／総合的な探究の時間編」⁶⁾に基づき、本稿で取り上げる探究活動の意味・内容を整理しておく。

高等学校における「総合的な探究の時間」では、「探究の見方・考え方」を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することを目指としている。ここで、探求とは、物事の本質を自己との関わりで探り極めようとする一連の知的営みと定義づけられており、「探究の見方・考え方」は、以下の一連のプロセス（図1）により得られると整理できる。

①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がって

くる疑問や関心を把握・整理し、

②これらに基づいて、自ら課題を見つけ【課題の設定】、

③そこにある具体的な問題について情報を収集し【情報の収集】、

④その情報を整理・分析したり、知識や技能に結び付けたり、考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み【整理・分析】、

⑤明らかになった考えや意見などをまとめ・表現し【まとめ・表現】、

⑥そこからまた新たな課題を見つけ、更なる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返す。

本稿では、この一連のプロセスのうち、②から④の過程（【課題の設定】→【情報の収集】→【整理・分析】→【まとめ・表現】）を「探究活動」と称する。

探究活動の当初に設定する探究課題は、横断的・総合的な学習が可能であり、教科・科目等の枠を超えて探究する価値のある課題を設定し、取り組むことが求められる。そして、「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説／総合的な探究の時間編」においては、探究課題の例として、表1に示す課題があげられており、これを参考としつつ、地域や学校の実態、生徒の特性等に応じて、横断的・総合的な学習としての性格をもち、探究の見方・考え方を働かせて学習していくことが求められている。

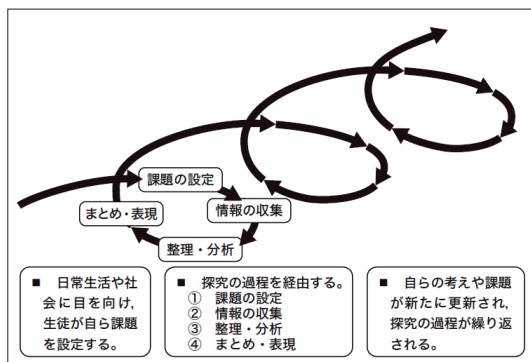


図1 探究における生徒の学習の姿と探究活動⁶⁾

表1 「総合的な探究の時間」における探究課題の例⁶⁾

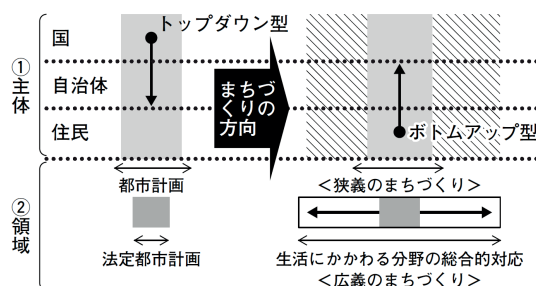
| 四つの課題 | 探究課題の例 |
|-------------------------|---|
| 横断的・総合的な課題 (現代的な諸課題) | 外国人の生活者とその人たちの多様な価値観(国際理解) 情報化の進展とそれに伴う経済生活や消費行動の変化(情報) 自然環境とそこに起きているグローバルな環境問題(環境) 高齢者の暮らしを支援する福祉の仕組みや取組(福祉) 心身の健康とストレス社会の問題(健康) 社会生活の変化と資源やエネルギーの問題(資源エネルギー) 食の問題とそれに関わる生産・流通過程と消費行動(食) 科学技術の発展と社会生活や経済活動の変化(科学技術) など |
| 地域や学校の特色に応じた課題 | 地域活性化に向けた特色ある取組(町づくり) 地域の伝統や文化とその継承に取り組む人々や組織(伝統文化) 商店街の再生に向けて努力する人々と地域社会(地域経済) 安全な町づくりに向けた防災計画の策定(防災) など |
| 生徒の興味・関心に基づく課題 | 文化や流行の創造や表現(文化の創造) 変化する社会と教育や保育の質的転換(教育・保育) 生命の尊厳と医療や介護の現実(生命・医療) など |
| 職業や自己の進路に関する課題 | 職業の選択と社会貢献及び自己実現(職業) 働くことの意味や価値と社会的責任(勤労) など |

2-2 まちづくり分野における取組経緯

2-2-1. “まちづくり”とは

わが国は、1960年代の高度経済成長の過程で、都市部への急激な人口や諸機能の集中が進み、市街地の無秩序な外延化が大都市圏を中心として全国的な課題として深刻化したことに対し、都市の将来像を掲げ、これに向け必要な規制・誘導・整備を行い、都市を適正に発展させようとする都市計画(空間的・計画的に制御・コントロールする方法や手段)に取り組まれてきた。都市計画は、主に都市の物的環境の改善を対象とすることから「物的計画(Physical Plan)」と称され、都市計画法に基づく都市計画(法定都市計画)は、土地利用規制、道路や公園等の都市施設の整備及び土地区画整理事業などの市街地開発事業に関し必要な事項を定めることにより、国や地方公共団体が主体となって、都市の健全な発展と秩序ある整備を進めてきた。

一方、1980年代には、法定都市計画で定める物的計画に加え、地域の特性に合わせた住民主体の街づくりを推進し、個性的で快適な都市環境を形成するために、地方公共団体が「まちづくり条例」を定める動きが活発化してきた。この条例では、“まちづくり”

図2 「都市計画からまちづくりへ」の変化の方向⁸⁾

を健康・福祉、教育、地域コミュニティの形成など、生活に関係する広い領域を対象とし、個性的で快適な都市環境形成を目指しており、中林⁷⁾は、“まちづくり”の構成要素として、①空間づくり、②環境づくり、③ルールづくり、④イベントづくり、⑤生業づくり、⑥ひとづくり、の6項目に整理している。

“まちづくり”は、高度経済成長期に端を発した法定都市計画による物的計画に基づく都市開発・都市整備に加え、住民が主体となって地域の特性に合わせた個性的で快適な都市環境を形成することを目指し、生活に関わる広い分野を対象とした活動全般であると捉えることができる(図2)。

また、まちづくりは、多くの住民が参加して、地域課題を抽出し、地域の理想像を描いていくことで、目標や具体的な事業を計画として取りまとめ、事業を進めていく、というプロセスを経て進められる。例えば、明石市においては、市民向けに「まちづくり計画書策定マニュアル」をつくり、地域におけるまちづくりの進め方を示している(図3)⁹⁾。

| |
|------------------------------|
| ステップ1: 計画書づくりの進め方を話し合う |
| ステップ2: まちの現状を把握する |
| ステップ3: まちの魅力と課題を考える |
| ステップ4: みんなで目指すまちの姿を考える |
| ステップ5: 目指すまちになるために組織体制を見直す |
| ステップ6: 目指すまちになるために取り組むことを考える |
| ステップ7: 検討してきた内容を計画書にまとめる |
| ▼ ステップ8: 計画書をまちのみんなにお披露目する |

図3 まちづくり計画書の策定手順⁹⁾

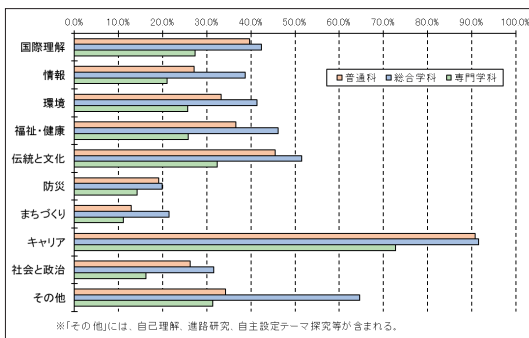


図4 高等学校における「総合的な学習の時間」の学習内容（実施学科数）¹⁰⁾

2-2-2. まちづくりを題材とした「総合的な学習の時間」の取組状況

文部科学省では、経年的に教育課程の編成・実施状況調査を実施してきており、この中で「総合的な学習の時間」についての取組状況を把握することができる。高等学校に関する最新調査（平成27年度）においては、全国の高等学校で「総合的な学習の時間」で取り上げている学習内容（学習課題）の分類が調べられており、その結果、まちづくりを学習内容としている学校は、普通科で約13%であった（図4）¹⁰⁾。

この調査において、まちづくりとは、前掲の表1に示す「地域活性化」が主たる内容であると考えられるが、本節前項におけるまちづくりの定義を踏まえると、「福祉・健康（約37%）」「伝統と文化（約46%）」「防災（約19%）」（括弧内の割合は普通科での数値を示す）なども「まちづくり」に含まれることから、多くの高等学校でまちづくりを題材とした「総合的な学習の時間」に取り組まれてきていることがわかり、また、建築・土木・都市計画の分野においても「総合的な学習の時間」に関する取組状況が報告されている¹¹⁾。

2-2-3. 「総合的な探究の時間」の題材としての「まちづくり」の親和性

高等学校における「総合的な探究の時間」では、①「探究の見方・考え方」を働かせ、②横断的・総合的な学習を行うこと、この2つの学びを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見

し解決していくための資質・能力を育成することを目標としている。

ここで、①「探究の見方・考え方」を働かせることは、前掲図1に示した探究の過程（探究活動）を習得することである。まちづくりの進め方は、前掲図3に示したように、探究活動と同じプロセスとなっている。また、探究の過程は、多くの解決すべき課題を抱える企業や公的機関等においても用いられているロジカルシンキング（問題解決プロセス、図5）とも同様であり、探究の過程を習得することは生きていく上で必要な力（「生きる力」）の重要な要素であるといえる。

さらに、②横断的・総合的な学習を行うことは、高等学校における学習活動では「各教科・科目の学習」とともに「教科横断的な学習（学際的な学び）」も求められていることを意味している。まちづくりでは、「環境」「福祉・健康」「伝統・文化」「防災」など地域に存する様々な地域課題に対し、横断的・総合的な視点より課題解決に取り組むことが求められることから、「まちづくり」は探究課題として適切であるといえよう。

加えて、「総合的な探究の時間」の探究課題は、生徒にとって馴染みのあるテーマであれば、生徒の授業への参加意欲が高まることから、探究課題は日常生活に関係するテーマを取り扱うことが望ましく、「まちづくり」は、「地域（フィールド）」という具体性があり、生徒でも理解しやすいため、「総合的な探究の時間」における探究課題にふさわしいと考えられる。

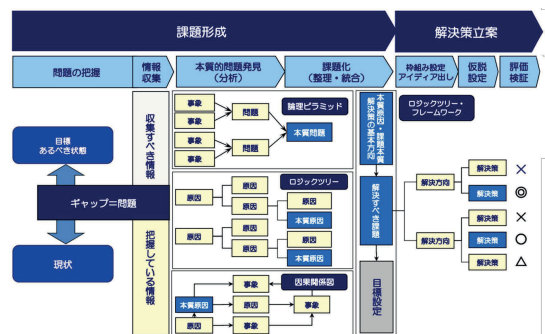


図5 ロジカルシンキング（問題解決プロセス）¹²⁾

2-3 まちづくりに関する高大連携事業のパターン分類

筆者は2017年以降、大学近隣の高等学校との高大連携事業や、いち早く「総合的な探究の時間」に取り組む高等学校との連携に取り組んできている。

原田は「総合的な探究の時間」における高大連携のパターンとして、①大学教員による講義の実施、②大学教員の研究テーマに即した専門的指導、③大学教員と高校教師の協働による探究活動プログラムの開発、④高校教師による指導への大学教員による後方支援、という4つのパターンをあげている（表2の①から④）¹³⁾。

筆者は、上記①から④のパターンの連携・支援をいずれも経験してきており、①については都市計画・まちづくり（地域コミュニティの衰退、買物弱者対策、防災など）やアカデミック・スキル（探究活動の進め方、クリティカル・シンキング、論理的文章の書き方など）に関する単発あるいは複数回での講義を実施してきている¹⁴⁾。さらに、②については生徒が高校教師と相談しつつ決めた探究課題について複数回の面談を通じて専門的指導を行なったり、筆者のゼミ学生と生徒によるグループワークにより探究活動に取り組んだ経験がある¹⁵⁾。また、③については高校側が実施する探究活動の中間発表会におけるプレゼンテーションの評価基準の設定・実施や、④については生徒と教員が進めるグループワークへの支援に取り組んできた¹⁶⁾。

さらに、「総合的な探究の時間」で取り上げる探究課題が幅広いテーマに渡る場合は、地域の政策や住民サービス、問題解決への対応などを担っている市役所や地域団体等の方々にも参加いただき、探究課題に対する助言等をいただくことが有効である。そのため、本稿では原田の4パターンに加え、⑤として「探究課題に対する助言等に市役所・地域が参加」という分類も加えることとした。これは、1学年約200名の生徒を対象とする「総合的な探究の時間」への支援を行う際には、大学教員だけでは十分に対応しきれず、探究課題に詳しい市役所の職員や地域団体の方々に参加・助言いただくことは探究活動を深める意味でも、また、高校と地域のつながりを深め

表2 「総合的な探究の時間」における高大連携のパターン分類

| パターン分類 | 大学教員 | | | 行政・地域の参加 |
|------------------------------|--------------------|-------|------|----------|
| | 講義 ○ (単発・複数) | 指導・助言 | 学生参加 | |
| ①大学教員による講義の実施 | ○ | — | — | — |
| ②大学教員の研究テーマに即した専門的指導 | ○ | ○ | △ | — |
| ③大学教員と高校教師の協働による探究活動プログラムの開発 | ○ | ○ | — | — |
| ④高校教師による指導への大学教員による後方支援 | ○ | ○ | △ | — |
| ⑤探究課題に対する助言等に市役所・地域が参加 | ○ | ○ | △ | ○ |

【凡例】○：参加・実施、△：参加・実施する場合あり、—：参加なし

る意味でも有意義であると考えられる。

そのため、本稿では、次章において、パターン⑤の取組みとして2017年度以降、継続的に取り組んできている、岡山県立笠岡高等学校における「総合的な探究の時間」を事例として、その概要や特色、実施効果等を考察していく。

3. 岡山県立笠岡高等学校における「総合的な探究の時間（ACT）」(地域学)

3-1. 「総合的な探究の時間（ACT）」(地域学)の概要

3-1-1. 岡山県立笠岡高等学校及び笠岡市の概要

岡山県立笠岡高等学校（以下、笠岡高校という）は、1902年に旧制笠岡町立笠岡女学校として創立した岡山県南西部（備西学区）に位置する男女共学の単位制普通科の高校であり、1学年約200名の生徒が学んでいる。生徒は笠岡市内を中心に、隣接する里庄町、浅口市（旧鴨方町、旧寄島町）、井原市、矢掛町から通学しており、「志高く自らの人生と社会の未来を拓く人を育てる」を教育目標とする県内有数の進学校である。笠岡高校が立地する笠岡市は人口約45000人、面積約136㎢の県南西部の中心都市であり、市内には、笠岡高校の他、商業高校、工業高校と私立高校の4校が存する。笠岡市は隣接する広島県福山市を中心都市とする福山都市圏に属し、福山市と文化的、経済的に非常に深い結び付きを持つ。また、市は瀬戸内海に面し、南には広大な笠岡湾干拓地と大小31の島々からなる笠岡諸島がひろがり、島嶼部は2019年に「知ってる!悠久の時間が流れる石の島～海を越え、日本の礎を築いた せとうち備讃諸島～」として日本遺産に登録された。

3-1-2.「総合的な探究の時間（ACT）」（1年次：地域学）の概要

笠岡高校では、2017年度より探究学習（課題探究）を軸にした学校改革に取り組んできている¹⁷⁾。具体的には、1・2年生の「総合的な学習の時間」のキャリアプログラム（ACT：Active Creative Thinking）において、2017年度の1年生から従来の進路学習（大学・学部研究や進路講演会など）に加え、生徒が社会的な課題に取り組む「課題探究」を開始した。1年生の「課題探究」では、学年全員が生徒5名程度でグループを組み、地域課題への対応を探究する「地域学」（地域探究活動）に取り組んでいる。

まず、探究課題の設定については、笠岡市の地域課題に即応すべく笠岡市役所との地域連携により、笠岡市が重点課題として位置づける具体的な探究課題を、毎年7つ程度提示してもらっている（表3に

令和2年度の探究課題を示す）。そして、生徒は市役所職員による探究課題についての講演を聴き、自身が興味ある課題を選び、グループを組み、職員とともにフィールドワークに行きながら、課題に係る現状把握に取り組む。

また、地域探究活動の進め方や情報の検索方法、グループワークの進め方などは、大学との高大連携事業として、講義・演習を行ない、必要なスキルを身につけてもらう。そして、一連の探究活動の成果をポスターにまとめ、市役所職員や保護者、地域の方々に向けた発表会を行う（写真1に発表会の様子を、表4に一連の実施内容を示す）。

以上、笠岡高校における「総合的な探究の時間（ACT）」（1年次：地域学）では、笠岡市役所との地域連携による探究課題の設定や助言等を行い、また、本学との高大連携により「地域探究活動の進め方」

表3 「地域学」探究課題（令和2年度）

| No | 担当課 | テーマ |
|----|-----------|--------------------------------|
| 1 | 環境課 | 家庭ごみの減量化・資源化 |
| 2 | 都市計画課 | 笠岡駅周辺を「つどう」場へ |
| 3 | 定住促進センター | 新しいライフスタイルの提案 |
| 4 | 竹喬美術館 | 笠岡市出身の画家小野竹高を多くの人に伝えるには |
| 5 | 農政水産課 | 干拓地の新しい農業 |
| 6 | 協働のまちづくり課 | 見つけよう！ 笠岡を輝かせる人・団体（自由テーマとして設定） |
| 7 | 企画政策課 | 日本遺産認定を活用した地域振興 |



写真1 地域探究活動／発表会の様子

表4 笠岡高校「総合的な探究の時間」（ACT：1年次「地域学」）実施内容

| 実施時期 | 実施内容 | 主たる担当 |
|------|---|-----------|
| 7月 | ①市長講演後、市役所各課（7課程度）から市が抱えている課題を説明。生徒は複数課の話を聴く。 | 市役所 |
| | ②探究課題の設定の仕方（課題点の調べ方）や探究手法等に関する講習を受講。 | 大学 |
| | ③生徒は聴いた話の中から最も興味をひかれたものをテーマとして選び、グループを形成。 | 高校 |
| | ④テーマごとに現地調査を行い、市役所職員からテーマに関する詳しい説明を受ける。 | 市役所 |
| | ⑤視察をもとに、グループの探究課題についてアイデアを出し合い、設定。 | 高校 |
| 8・9月 | ⑥夏季休業中に個人調査、グループでの調査を進め、中間レポートを作成。 | 高校、大学 |
| 10月 | ⑦中間レポートの発表（中間発表会）。その際、発表の形式・スタイルや内容に関して評価する。 | 高校、市役所、大学 |
| | ⑧評価結果を受け、ポスター作成に向けたまとめ方（クリティカルシンキング）の講習を受講。 | 大学 |
| 11月 | ⑨中間レポートの評価や講習を受け、内容の修正・追加調査を行う。 | 高校 |
| | ⑩追加調査を経て、ポスター・発表原稿を作成。 | 高校 |
| 12月 | ⑪市役所職員や保護者等を招いて、ポスターセッション（最終発表会）を実施。 | 高校、市役所、大学 |
| | ⑫「地域学を振り返って」（キャリアパスポート）を活用して評価を行う。 | 高校 |

〔資料〕 笠岡高校提供資料に基づき筆者作成

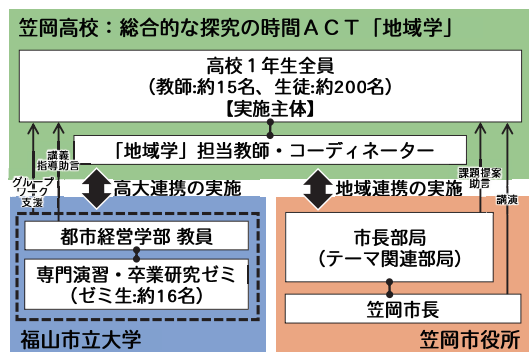


図6 1年次「地域学」の実施体制

や「プレゼンテーション講習（クリティカル・シンキング）」の講義・演習やグループワークに対する助言等を行うことで、正解のない課題について探求し、解決へのアプローチ方法を身につける課題探究に取り組んできている（図6に実施体制を示す）。

次節では、一連の地域探究活動において、大学側が関与する事項とその概要について整理していく。

3-2. 大学側が関与する事項とその概要

笠岡高校における地域探究活動において、大学側が関与してきている事項は、1)講義・演習【表4②・⑧】、2)、生徒によるグループワークへの助言【表4⑥】、3)中間発表における発表形式や内容の評価【表4⑦】、4)最終発表会での講評等【表4⑪】である。

以下、1)から3)の取組概要を記す。

3-2-1. 大学教員による講義・演習【表4②・⑧】

「地域学」に係る高大連携として、高校側から依頼があった事項として、「地域探究活動の進め方」や「プレゼンテーション講習（クリティカル・シンキング）」の講義・演習がある。本学都市経営学部では、学部実践科目として、まちづくりに関する演習科目（まちづくり計画特講・まちづくり計画実践演習）において、学生が地域探究活動に取り組んでおり、また、学部1年次の必修科目としてアカデミック・スキルの基礎である「クリティカル・シンキング」等を教えてきている。そのため、大学側で担当する講義・演習は、大学の授業として実施してきている内

容を、高校1年生に理解してもらえる内容に噛み砕き、また、講義内に演習を入れることで、スキルを身につけてもらうよう、工夫した。

なお、2020年度・2021年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、オンライン授業（リアルタイム方式）にて実施してきている。

（1）講義：「地域探究活動の進め方」

「地域探究活動の進め方」講義では、図7に示すように、地域探究活動の定義や進め方（プロセス）、現地調査の取り組み方、グループワーク等において意見やアイディア等をまとめる・整理する方法（ブレーンストーミング&KJ法）について、演習を交えながら講義を進めた。

この講義で重視したことは2点あり、1点目は生徒たちに地域探究活動の進め方（プロセス）を理解してもらうことである。探究活動では、「総合的な探究の時間」で求められる、「探究の見方・考え方」を働かせるために、前掲図1に示した探究の過程を習得することが肝要であり、生徒が社会人として生きていく上で、社会の急激な変化に対応し、自分で課題を見つけ、情報を収集・整理・分析し、課題解決に取り組める資質・能力を身につけることが期待される。講義では、図8に示すように、探究のプロセスを示すとともに、具体的な事例を示し、生徒に探求プロセスを理解してもらうことを工夫した。

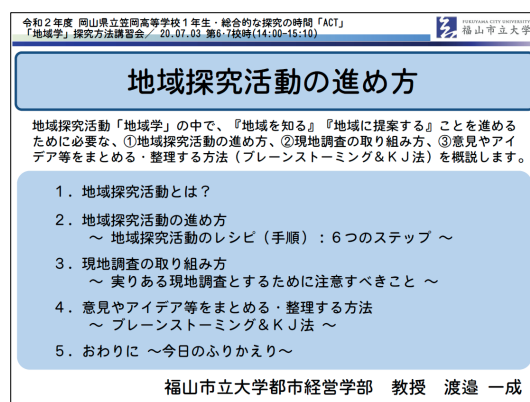


図7 「地域探究活動の進め方」講義内容

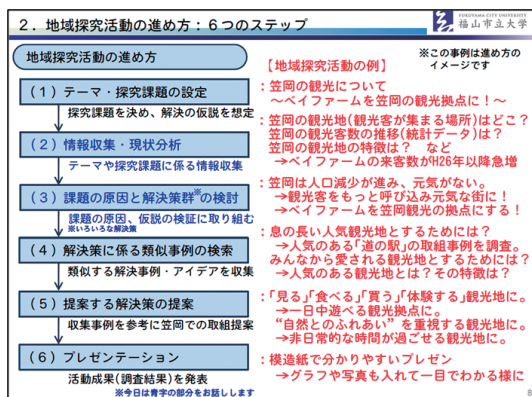


図8 地域探究活動のプロセス

重視したことの2点目は、グループワークにおける話し合いの進め方について、である。地域探究活動では、課題解決に向けた解決策のアイデアを出し合う場面があるが、その際には、①自由に発想する、②意見やアイデアを出し合う、③出した意見等をまとめる、という手順で進め、①と②は「右脳思考」で、③は「左脳思考」で検討を進めることとなる(図9)。そのため、グループワークにおける話し合いの進め方を簡単な演習で進めてもらい、体験してもらいつつ、正解のない課題についての探究方法・解決へのアプローチ方法を身につけてもらうことを目論んでいる。

「地域探究活動の進め方」講義は、生徒たちに理解しやすいよう、具体事例を示しながら探究活動の進め方や、意見やアイデア等のまとめ方を説明してきているが、講義後の地域探究活動担当教師との話の中で「地域探究活動のクラス担当教師からも「指導要領等により探究活動の進め方を自分なりに勉強・準備していたが、講義を聴いて進め方への理解が深まり、生徒たちへの指導イメージをもつことができた。」との感想があった」と聞き、想定外の効果が生まれた。高校教師は、大学等における教職課程において各科目・教科の指導法を学んできているが、多くの教師は「総合的な学習(探究)の時間」に関する指導法を学ぶ機会がないと考えられることから、大学教員による「地域探究活動の進め方」講義は、生徒だけでなく地域探究活動の担当教師にとっても有意



図9 課題整理の方法

義な講義になるといえる。

(2) 講義：「プレゼンテーション講習(クリティカル・シンキング)」

「プレゼンテーション講習(クリティカル・シンキング)」の講義・演習は、本学の都市経営学部1年次の必修科目として導入している、株式会社ベネッセiキャリアによる大学支援・キャリア教育支援サービスである「クリティカルシンキング・ロジカルライティング」¹⁸⁾を参考とし、①納得のいく成果整理のコツ、②納得のいく発表のコツ、③上手な質問のコツ、について講義を行ってきている(図10)。

探究活動での取り組みにおいて、各教科・科目での学びと異なる点は、唯一の正解が存在しない課題

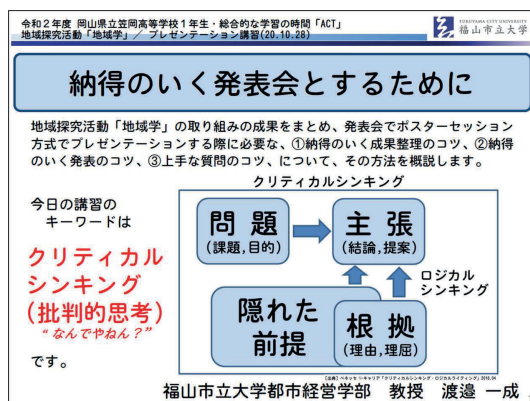


図10 「プレゼンテーション講習」講義内容

に対して、最適解や納得解を見いだすことを重視しているという点である。すなわち、探究課題の解決策は「正解を導き出す」のではなく、自分たちが提案する解決策について、「提案理由を論理的に説明し、相手・聞き手の納得を得ること」が求められる。そのため講義では、生徒に対し、『解決策の「正解」はわからない。でも、わからないから適当に答えを出せば良いのではなく、なぜ自分たちが導き出した解決策が優れていると言えるのかを、聞き手が納得できるように説明することが重要である』ことを理解してもらう講義・演習を進めている。特に講義内の演習では、文献18)で取り上げられている「英語の点数をあげるための対策を考える」事例を参考に、生徒に自らの問題として英語の点数をあげるための対策を考えてもらい、英語の点数をあげるための対策に正解はないが、様々な対策の中で、なぜ当該の対策を選ぶのか(理由)を明確にすることの必要性を説いている。

また、クリティカル・シンキングの枠組み(図11)は、探究活動を進める上で解決策を導き出す整理方法であるとともに、わかりやすいプレゼンテーションのシナリオづくりでも役立つ。つまり、「問題・主張・根拠・隠れた前提」の4点を明確に示すことで、聞き手にわかりやすい、理解を促進するプレゼンテーションを実施することができると考えられる。また、他者のプレゼンテーションに対する聴き方も、「問題・主張・根拠・隠れた前提」の4点について、理解できなかった点や考え方が異なる点について質問することを説明している。

以上、「プレゼンテーション講習」では、聞き手にわかりやすい話し方やポスター作成法(図12)とともに、適切で論理的な課題の発見と解決ができるような手法(クリティカル・シンキング)を理解してもらう、身につけてもらうことを重視して進めてきている。

3-2-2. 大学教員・学生等によるグループワークへの助言【表4⑥】

地域探究活動のグループワークは、主に教師と生徒により進められるが、途中段階で大学教員・学生等によるグループワークへの助言を行う機会が設定

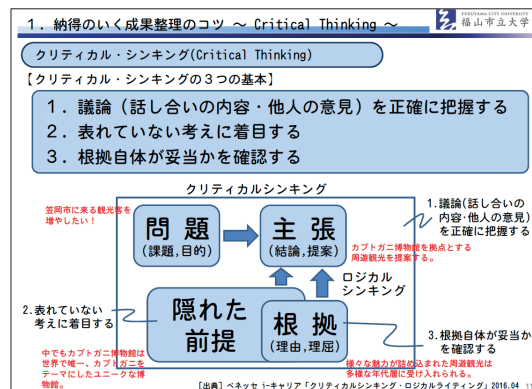


図11 クリティカル・シンキングのポイント

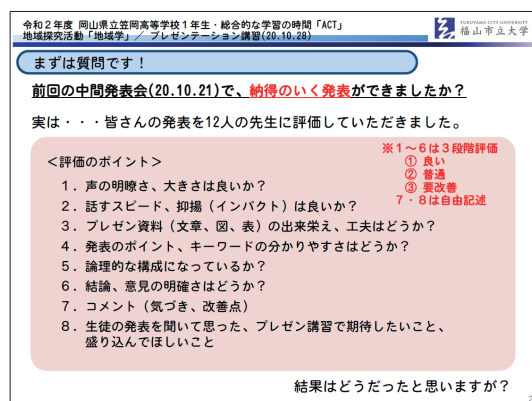


図12 プレゼンテーション評価

されている(表4⑥)。笠岡高校では、高校1年次約200名が40グループ程度に分かれて探究活動を進めていることから、各グループへの助言を行う場合、15名程度の学生が探究課題(表3に示す7つ程度の課題)にわかれ助言を行ってきた(写真2)。しかしながら、グループワークが集中的に進められる高校の夏季休業期間(7月下旬から8月下旬)と大学の夏季休業期間(8月中旬から9月下旬)にズレがあること、また学生は授業や課外活動等で多忙である(夏季休業期間も集中講義や企業等へのインターンシップ参加がある)こと、グループワークへの助言に先立って学生に探究課題への理解を深めてもらう事前学習が必要であるが時間確保が難しい等、学生によるグループワークへの助言は日程調整や事前準備等が極めて厳しい。



写真2 学生によるグループワークへの助言

学生がグループワークへの助言に参加することは、「助言することからの学びの機会」として貴重な機会であり、得るものも多いと思われるが、2020年度以降は新型コロナウイルス感染症拡大の影響も踏まえ、グループワークの取組状況を、①グループの設定課題、②設定の背景・理由、③課題解決の仮説、などをまとめたA4版1枚のレポートを作成してもらい、これを筆者が見て、深掘りを進めるべき点や今後情報収集すべき点などの助言を指摘し、フィードバックする方法に変更してきている。

3-2-3. 中間発表における発表形式や内容の評価【表4⑦】

3-2-1(2)に記した「プレゼンテーション講習」講義に先立ち実施される中間発表会【表4⑦】において、クラス担当教員や市役所職員の方々に、生徒の発表に対する気づきを指摘いただくために、図13に示すプレゼンテーション評価の視点に基づき、中間発表における発表形式や内容の評価していただいている。

プレゼンテーションの評価は、①視点1：プレゼン

| 班・グループ (発表テーマを記入欄に記入) | 視点1：プレゼンテーションの形式・スタイル 声の大きさ、大きさ 話すスピード、抑揚 (インパクト) 発表資料(文章、図、表)の 出来栄、工夫 | 視点2：プレゼンテーションの内容 発表のポイント、 キーワードの分かりやすさ 論理的な構成 結論、意見の明確さ | コメント(気づき、改善点) |
|--------------------------|---|---|-----------------------|
| 1 | 1 良い 2 普通 3 悪改善 | 1 良い 2 普通 3 悪改善 | 1 良い 2 普通 3 悪改善 |
| 2 | 1 良い 2 普通 3 悪改善 | 1 良い 2 普通 3 悪改善 | 1 良い 2 普通 3 悪改善 |

図13 プレゼンテーション評価の視点

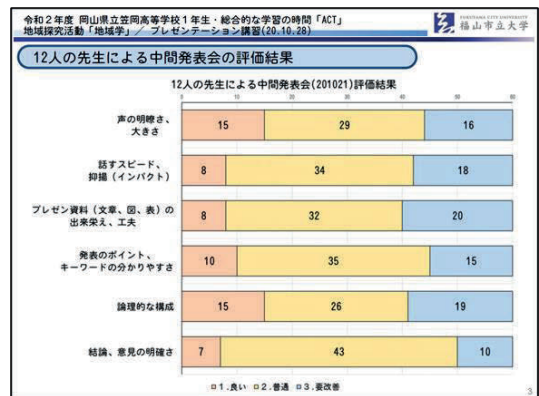


図14 プレゼンテーション評価結果(項目評価)

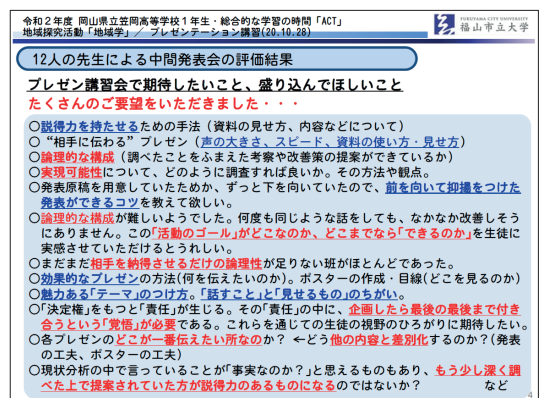


図15 プレゼンテーション評価結果(自由記述)

ンテーションの形式・スタイルに関する事項、②視点2：プレゼンテーションの内容、③その他コメント(気づき、改善点)などについて評価いただき、この結果を「プレゼンテーション講習」講義にて生徒に発表するとともに、評価の高い事項や改善事項等を指摘している(図14, 15)。

3-3. アンケート結果より読み取れる取組成果の考察

2018年度に実施した地域探究活動に係る生徒アンケート結果を図16に示す。その結果、参加への満足度(設問7)では約68%の生徒が「非常にそう思う、そう思う」と回答しており、地域探究活動への満足度は高いことが伺える。また、笠岡への関心の高まり

(設問5) に対しては約65%の生徒が「非常にそう思う、そう思う」と回答している。同学年の笠岡出身者は約43%であり、近隣市町出身者が多い(図17)ことから、地域探究活動を契機として、地域への関心が高まったことが伺える。「総合的な探究の時間」では、この学習活動を契機として、生徒が地域への愛着を高め、地域の人々と近しくなったり、地域の自然や文化などに関心をもったり、地域の伝統行事等に主体的に参加したりするようになることで、「ふるさと」への理解を深めることで「ふるさと意識の醸成」が期待される。高校生は、進学や就職により地域を離れ、高校生活がふるさとを感じる最後の機会となる可能性があり、また、自分たちで企画・運営ができ得る世代でもあることから、この時期に「総合的な探究の時間」により主体的に地域について学ぶことは、ふるさとへの愛着や誇りを培う上で、大きな効果をもたらすと考えられる。

3-4. 取組成果の地域展開

2017年度に行った地域探究活動において、「笠岡の都市計画：駅を中心としたにぎわい創出のあり方

H30年度A C T (地域学) アンケート結果

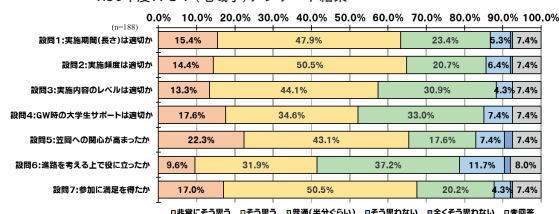


図16 総合的な探究の時間(ACT・地域学)の生徒アンケート結果

H30年度1年生/出身中学

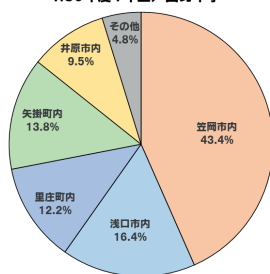


図17 生徒の出身地



写真3 笠岡高校の生徒によるイルミネーション

は」という探究課題に対し、生徒より「イルミネーション実施」が提案された。この提案を受け、笠岡市役所では2018年冬に「笠岡駅前イルミネーション」を実施すべく、予算の獲得、笠岡駅前地区の活性化に取り組む市民団体への相談を進め、生徒による提案の実現に取り組んだ。そして、市民団体より「笠岡高校だけでなく、笠岡市内の5つの高校等による取り組みとしたい」との提案により、イルミネーションは市内の高校等で学ぶ高校生により企画・実施されることとなり、この取り組みを聞いた市内企業等から協賛金の申し出が出され、「総合的な探究の時間」より生まれた賑わい創出の提案は、街全体の取り組みへと展開されていった。

2018年12月15日、J R 笠岡駅前の冬のイルミネーションが10年ぶりに復活し(写真3)、約1ヶ月間、笠岡の玄関口に、市民主導のイルミネーションという明るい話題を町にもたらした。そして、この取り組みは、その後も継続的に実施されてきており、笠岡市内高校の生徒は、笠岡駅前のクリスマスや正月の演出に貢献し、賑わいの創出に貢献してきている。

4. おわりに：得られた成果と今後の展望

本稿は、筆者が2017年度以降取り組んできている、「まちづくり」を題材とした高大連携による地域探究活動の概要や成果、課題を整理し、「総合的な探究の時間」における「まちづくり」を題材とした高大連携の可能性と期待される事項について考察することを目的とした。

その結果、以下の5つの事項を明らかにすること

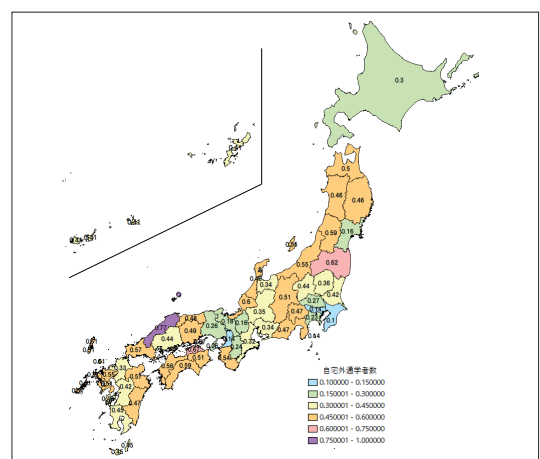
ができた。

- 1) まちづくりは、多くの住民が参加して、地域課題を抽出し、地域の理想像を描いていくことで、目標や具体的な事業を計画として取りまとめ、事業を進めていく、というプロセスを経て進められ、「環境」「福祉・健康」「伝統・文化」「防災」など地域に存する様々な地域課題に対し、横断的・総合的な視点より課題解決に取り組むことが求められ、さらに、「地域（フィールド）」という具体性があり、生徒でも理解しやすく、馴染みのあるテーマであることから、「総合的な探究の時間」において「まちづくり」を題材とすることは適切であると考えられる。
- 2) まちづくりを題材として「総合的な探究の時間」に取り組む際には、高大連携とともに、問題解決への対応などを担っている市役所や地域団体等の方々にも参加いただき、探究課題に対する助言等をいただくことが有効であり、探究課題に詳しい市役所の職員や地域団体の方々に参加・助言いただくことは探究活動を深める意味でも、また、高校と地域のつながりを深める意味でも有意義であると考えられる。
- 3) 「地域探究活動の進め方」に係る講義は、生徒が活動の進め方を学ぶとともに、高校教師に対しても、地域探究活動への理解が深まり、生徒たちへの指導イメージをもつことを支援する機会でもあったと考え、生徒だけでなく地域探究活動の担当教師にとっても有意義な講義になるといえる。
- 4) 「総合的な探究の時間」での学習を契機とし、生徒が地域への愛着を高め、地域の人々と近しくなったり、地域の自然や文化などに関心をもったり、地域の伝統行事等に主体的に参加したりするようになることで、ふるさとへの理解を深め、ふるさとへの愛着や誇りを培う上で、大きな効果をもたらすと考えられる。
- 5) 上記2)の枠組みで進めることにより、地域探究活動の成果を受け、市役所や地域団体等が実現することにより、多くの市民等を巻き込んだ取り組みとして展開されていくことが期待で

き、「総合的な探究の時間」より生まれた提案が、街全体の取り組みへと展開され、地域の活性化に向けた展開が期待できる。

3－3節で記したように、高校生は進学や就職により地域を離れるケースが多く、とりわけ地方都市で、その傾向が顕著である。日本政策金融公庫が公表している、令和2年度「教育費負担の実態調査結果」によれば、島根県や香川県、福島県などでは高校生以上の子どもの自宅外通学者数が多く、首都圏や近畿圏、宮城県などでは自宅外通学者数が少ないことが明らかになっている（図18）²²⁾。高校生にとって高校生活がふるさとを感じる最後の機会となる可能性があり、また、自分たちで企画・運営ができれば、この時期に「総合的な探究の時間」により主体的に地域について学ぶことは、ふるさとへの愛着や誇りを培う上で、大きな効果をもたらすと考えられる。

また、全国の市区町村における高等学校の立地状況を見ると、多くの市区町村に高等学校が立地しており（図19に中国地方の立地状況を示す。青塗りの市区町村に高等学校が立地している。）、「総合的な探究の時間」を契機に地域探究活動に取り組み、笠岡市で見られるような高校生による賑わい創出が地域と結びついて実現すれば、地域の活性化に寄与していくことが期待される。



【資料】日本政策金融公庫による調査結果²²⁾を図化
図 18 都道府県別の自宅外通学者数

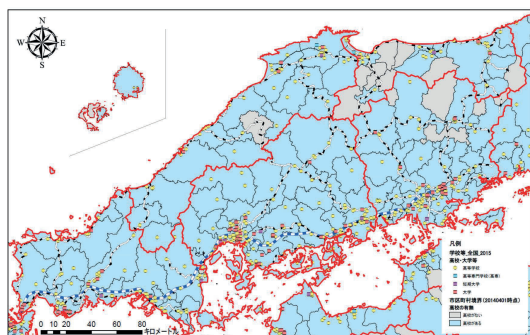


図19 市区町村別の高校・大学等の立地状況

高等学校における、まちづくりを題材とした「総合的な探究の時間」は、①「探究の見方・考え方」を働かせ、②横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方・生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力が生徒に育まれるとともに、人口減少・少子高齢化に至っている地方都市での、地方創生への展開や人材育成に繋がっていくことを期待したい。

本稿を執筆するに当たり、岡山県立笠岡高等学校より生徒アンケート調査結果等の情報提供をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

なお、本稿での誤りは、すべて筆者の責に帰するものである。

参考文献

- 1) 文部科学省ホームページ／高大接続改革
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/index.htm (最終閲覧：2021.09.15)
- 2) 例えば、教育ネットワーク中国における高大連携事業の取り組み
<http://www.enica.jp/03highschool/> (最終閲覧：2021.09.15)
- 3) 高橋利行：高大連携の観点からの高等学校「総合的な学習の時間」に関する考察，岐阜経済大学論集，Vol.51，No.1，pp.203-121，2017
- 4) 太田尚孝・渡邊一成：福山市における高大連携活動「地元高校生が考える福山駅前再生計画」の試みと課題，第16回日本都市計画学会中国四国支部研究発表会・研究講演集，16，pp.23-26，2018
- 5) 渡邊一成：高大連携事業の取組効果と将来展望－福山市立大学での取り組みを事例として－，第17回日本都市計画学会中国四国支部研究発表会・研究講演集，17，pp.21-24，2019
- 6) 文部科学省：高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説／総合的な探究の時間編，2018.3
https://www.mext.go.jp/content/1407196_21_1_1_2.pdf (最終閲覧：2021.09.15)
- 7) 中林一樹：大都市郊外地域のまちづくり活動と街づくり条例（羽貝正美編著：自治と参加・協働），学芸出版社，pp.220-258，2007.8
- 8) 内海麻利：まちづくり条例の実態と理論－都市計画法制の補完から自治の手だてへ，第一法規株式会社，pp.23-25，2010.3
- 9) 明石市：まちづくり計画書策定マニュアル（H27.8時点）
https://www.city.akashi.lg.jp/community/s_kyoudou_shitsu/kurashi/community_machizukuri_shimin/houshin/keikakusyo.html (最終閲覧：2021.09.15)
- 10) 文部科学省：平成27年度公立高等学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1368209.htm (最終閲覧：2021.09.15)
- 11) 例えば、藤井聡：公共的問題を題材とした「総合的な学習の時間」の是非について，土木計画学研究・講演集(秋大会)，26，2002
http://library.jsce.or.jp/jsce/open/00039/200211_no26/pdf/201.pdf (最終閲覧：2021.09.15)
- 12) 石坂英男：ロジカルシンキングで問題解決！みんなで使う問題解決プロセス！
<https://www.ltkensyu.com/2583> (最終閲覧：2021.09.15)
- 13) 原田拓馬：高大連携に基づく「総合的な探究の時間」の支援体制の整備に向けて，活水論文集（活水女子大学），Vol.64，pp.41-46，2021.3
- 14) 例えば，近畿大学附属広島高等学校・中学校 福山校：探究活動講演会

<http://fukuyama.kindai.ac.jp/column/2019/07/post-2282.html> (最終閲覧: 2021.09.15)

- 15) 例えば、福山市立福山高等学校・中学校:【事業報告】夢チャレ「市立大学との高大連携事業」(高2)②(平成30年度), ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) 指定「サステナブルスクール」3年間の取組と成果(報告書), p.29-30, 2018.12.8
- 16) 例えば、岡山県立笠岡高等学校: 令和2年度1年次生「地域学」探究課題設定講習会, 2020.8
<http://www.kasaoka.okayama-c.ed.jp/wp/?p=14571> (最終閲覧: 2021.09.15)
- 17) 岡山県立笠岡高校/探究学習を軸にした学校改革: 全校体制で資質・能力ベースの指導改善を推進し, 自己実現への「志」を育む(指導改革の軌跡No.263), 『VIEW21』高校版(ベネッセ教育総合研究所), pp.38-41, 2019.12
- 18) 株式会社ベネッセi-キャリア: 「型」で身につける学びの土台 クリティカルシンキング・ロジカルライティング, p.112, 2016.4
- 19) 笠岡駅前10年ぶりにイルミーにぎわい創出へ地元高校生協力, 中国新聞, 2018.12.17
- 20) 笠岡の高校生 年末盛り上げ一駅前でイルミ/離島でツアー, 中国新聞, 2019.12.28
- 21) 笠岡駅前 広がる光の世界ー12月電飾 地元高校生演出, 中国新聞, 2020.10.6
- 22) 日本政策金融公庫: 令和2年度「教育費負担の実態調査結果」, 2020.10.30
https://www.jfc.go.jp/n/findings/pdf/kyouikuhi_chousa_k_r02.pdf (最終閲覧: 2021.09.15)

A Methodology Study of “Period of Integrated Study”(Regional Research Activities) by High School-University Collaboration about the Teaching Materials of “MACHIZUKURI(Community Development)”

Kazunari WATANABE

Abstract

The aim of this paper is to consider the possibility and expected matters of high school-university cooperation in "Period of Integrated Study" on the teaching materials of "MACHIZUKURI (Community Development)".

As a result, the following matters were clarified.

- (1) MACHIZUKURI tackles various regional issues from a cross-sectional and comprehensive perspective, and has the specificity of "Region(field)", which is easy for students to understand and is a familiar theme. So, It is considered appropriate to use MACHIZUKURI as the teaching materials in "Period of Integrated Study".
- (2) When working on "Period of Integrated Study" with the teaching materials of MACHIZUKURI, it is effective that we invite people from the city hall and local organizations who are in charge of problem solving as well as high school-university cooperation to give advice.
- (3) It is thought that the learning in the "Period of Integrated Study" will have a great effect on the students to increase their attachment to the community and to cultivate their attachment and pride in their hometown.

Keywords : Period of Integrated Study, Regional Research Activities, High School-University Collaboration,
MACHIZUKURI(Community Development)

DOI : 10.15096 / UrbanManagement.1414

